

# 日本近代文学

Modern Japanese Literary Studies

## 第104集

### 論文

アインザーム  
「孤独」な交友

——太宰治「惜別」と地方文化運動——

若松 伸哉 1

澁澤龍彦の出発

——「撲滅の賦」と黒いユーモア——

跡上 史郎 16

新垣美登子「黄色い百合」論

——米軍占領下沖縄の民法改正運動を背景に——

佐久本佳奈 32

展望小特集 ICTを利用した学会運営について

オンライン学会運営における課題と、  
その「隔絶」が生む可能性について

副田 賢二 47

オンラインの時代に学会は何を提供できるのか 掛野 剛史 53

遠隔でつくる人文社会学知の可能性と課題

——二〇二〇年におけるオンライン研究会の  
運営経験から——

茂木謙之介 57

展望 アンソロジーを編むことの可能性と課題

和田 博文 63

思えば私が最初に学会に参加したのは、一九九八年六月に成蹊大学で開催された川端康成研究会だった。卒論で横光利一に取り組もうとしていた時に、大学の研究室に貼られていた案内を見て参加する気になったのだ。当日については、会場の片隅で見た発表とその後の質疑の光景がぼんやりと記憶にあるくらいで、細かい内容は覚えていないが、初めて眼にする研究者の姿に、ここに「研究」があるのだと思った。

その後、しばしば学会に参加するようになったが、研究の知見を得るためという側面ももちろんあったが、言葉で説明したい実際の空気に触れるために参加していたといっている。そこで眼にした研究者の発言や振る舞い、会場の空気といった無形のものに私は「研究」の現場であり、そこに連なることで学問的な立ち位置を見定めることができた。学問的な成果を求めるのであれば家で論文を読んでいた方がいいわけで、学会に出席して「研究」の現場に当事者として関わっているという意識が、良くも悪くも私の研究者としてのアイデンティティを形成したのだと思う。もちろんそうした意識をくだらないものとして冷笑することはできるだろう。しかしそれを笑えるのはその人が所属していた大学院なりの組織が即ち「研究」の現場だった幸運によるものであり、全くの外野から参加した若い研究者にとっては、学会の会場で醸し出される空気は「研究」の道しるべになり得たのである。学会というのは研究の場を提供すると同時に、そうした公共空間を提供することもまた

一つの務めではないだろうか。

オンラインでの学会は非常に効率的だ。国外からでも参加できるし、強制的にカメラとマイクをオフすることを求められるので、子供をあやしめながら自宅で発表を聞くことができる。その意味で利点は大きい。だがディスプレイ上には、かつての私を感じたような公共空間は存在するのだろうか。対面開催の代替としてのオンライン開催という段階は過ぎた現在、オンライン開催を基本とした形でいかに学会としての役割を果たせるのか。折しも二〇一九年一月には日本近代文学会・昭和文学会・日本社会文学会合同国際研究会という新しい試みが行われ、学会の進むべき一つの方向性を示してくれた。学会という公共空間をいかに次世代に引き継いでいけるか。学会を取り巻く状況は厳しいながら「できることにとどまるのではなく、なすべきことを追求しなければならない」（山口直孝「学会ができることとなすべきこと——日本近代文学会・昭和文学会・日本社会文学会合同国際研究会を終えて——」『日本近代文学』二〇二〇年一月）という言葉は、実際に運営にあたった人の言葉だけに重く響く。

【キーワード】COVID-19、横光利一文学会、個人作家学会、

オンライン開催、学会の公共性

（かけの・たけし／埼玉学園大学）

■展 望■  
〈小特集〉ICTを利用した学会運営について

## 遠隔でつくる人文社会学知の可能性と課題

——二〇二〇年におけるオンライン研究会の運営経験から——

茂木謙之介

今回、編集委員会からはICTを利用した学会・研究会運営のうち、特に「大学レベルでの研究会」のオンライン開催について、その可能性と課題を論じることを求められた。

筆者は二〇二〇年の間に所属大学の複数研究室が共同運営する研究会（日文学研究会）と、多領域にまたがって単一テーマを扱う研究会（怪異怪談研究会）の運営に当たった。後者は依頼内容とは若干ずれるが、重複もあるため本稿では併せて記述したい。以下、両研究会の属性を示し、夫々を如何に運営したかを述べ、研究会遠隔開催の可能性と課題について記述する。

なお、本稿で示すものは研究会を限られた回数運営した結果に過ぎず、一般化が可能なものではない。但し、二〇二〇年五月という早い段階で遠隔研究会を開催し、その後遠隔研究会を同一年内に複数回運営した者はそこまで多くないと考えられる

ため、一つの記録としての意味は持ち得るだろう。故に本稿は、二〇二〇年代初頭のオンライン研究会についての歴史記述であるとともに、後世にそれを伝える史資料ともなることを目指すものでもある。

まず日文学研究会は二〇二〇年二月に国際的・学際的な視角から（日本）を考究する開かれた場として、東北大学文学研究科（現代日文学研究室）と同国際文化研究科（国際日本研究講座）を中心に新たに立ち上げた研究会である。東北大学の二研究室が運営を行っているが、発表者や来聴者の所属や専門分野については全く制限していない研究会であり、日文学に関連する研究ならば全て受け入れることを旨としている。

キックオフとして第一回の学術大会を二月二日に対面実施

し、当初の段階で年一回の学術大会のほか、二、三か月に一度程度学内での研究会を開催することを目指していたが、その後コロナ感染者が増えたことに伴い対面での研究会開催は殆ど不可能な状況となったため、第一回の定例研究会のオンライン開催を決定した。特に二〇二〇年度前期の早い段階において各種研究会・学会の延期・中止が決定される状況下で、これからキヤリア形成を行わなければならない若手の研究成果発表の場を急務であつても作る必要がある、その為には如何なるものであれ可能性を模索しなければならなかつた。

かかる問題意識のもと、広く若手を中心に発表機会を失つた研究者に向けて「Twitter や Facebook といった SNS の個人アカウントを通じて呼びかけたところ、東北大学の他、広島大学、東京大学、ハイデルベルク大学に所属の院生・ポスドクから申込みがあつた。報告者と日程（五月三十一日午後）を確定後、SNS や各研究室の Web サイトを中心に告知を行った。

なお研究会実施のプラットフォームは双方方向の Zoom ミーティングとした。これは運営委員の一人が Zoom のビジネスプラン（時間無制限ながら百名が参加上限）に個人で加入していたものを利用してもらうこととしたためである。募集に先立って同氏とは時間無制限かつ人数も（プランによっては）一万人を上限とする Zoom ウェビナーを利用するか、それともビジネスプランのままで行くかを相談した。既に筆者は Zoom ウェビナーで開催された研究会に参加した経験があり、その際運営と

報告者のみが全参加者を把握でき、参加可能人数も多く、ミーティングの解除や発言なども一元管理できるというウェビナーの利点が見えた一方で、①参加者同士は誰がいるのか不明、②そもそも月毎の料金が高い（五千円ほど）という問題があつたため、今回の研究会は上限の百名まで集まるまいとミーティングで行うこととした。（実際には前日までに百名を超える参加者申し込みがあつたため前倒して締め切つた）。前述のように初期のオンライン研究会の事例であつたため、単なる視聴のみならず学会運営関係者や発表予定者も「下見」として参加した趣があつた。さて当日に至るまでの運営準備だが、まず報告予定者には前日までのレジューム提出とレジュームへのメールアドレス明記を求めた。前者は参加者に向けて事前に Zoom の URL 等参加情報を送るに際して共にレジュームも送るためであり、後者は質疑時間が限られている状況下で事後に意見交換を行う可能性を担保するためであつた。なお報告予定者が技術的に Zoom を経由して報告ができるかどうかを確認するために前日までに予定を調整し通信の練習を実施した。

するメールに対しては予め返答用の定型文を作り、ある程度機械的に返信するとともに、参加者のメールアドレスはエクセルで一括管理し、当日午前中にレジュームのデータと Zoom への招待 URL を合わせて BCC にて一括で連絡するようにした。なお、このメールアカウントは筆者ともう一人の運営委員のみが開けるようにし、気づいた者が返信するようにしていたが、わずかに二人でも行き違いは生まれ、最終的な確認に時間を要した。これは Google フォームを作成し、そこでメールアドレス等を集約して後にまとめて送信するなど、よりシステムティックな方法を採用すべきであつた。ちなみにレジュームのデータは当初添付ファイルで送付する予定であつたが、迷惑メールへの振り分けが予測されたため、事前にクラウドにアップロードし、暗号化した上で参加者にパスワードと URL を添えて当日昼に送信した。

さて、当日は基本的に報告二〇分・質疑一五分とし、各報告の間に一〇分間の休憩時間を入れた。同日は特定の報告だけを聴きたい参加者の出入りが頻繁に起きる可能性があつたため時間の管理は特に厳密に行つた。これによって報告が少しはみ出してしまった場合にも基本的に休憩時間に収まるようにしたが、実際は殆ど定刻で進行し、休憩時間は雑談の時間として参加者が報告者に向けてざっくりばらんに話す機会となつた。

来聴者には画面と音声の送信を切ってもらい、静粛な環境を創出するとともに参加者の通信容量に配慮した。質疑に際して

は Zoom の「チャット」機能から文章で打ち込んでもらうか、「反応」タブから挙手してもらうようにしていたが、人数が多かつたため「反応」を確認しきれなかつた。八月二日に実施した二回目の定例研究会ではそれに対応するため「チャット」で意思表示をしてもらい、そこから指名するかたちに一本化した。これに関連しては、質問をテキストベースでまとめるのも一案であろう。また報告者の多い研究会では時間が限られているため、各報告一人目の質問者は予め指定しておくのもよいと思われた。報告者に事前に参加者リストを見せ、コメントや質問が欲しい参加者を指名してもらう方法を思いつき、第二回以降で採用した。基本的にこれらの研究会では活発に議論が展開しており、質疑の時間内にチャットで議論が展開するなど従来では見られなかつた現象があつたことは記録しておきたい。

なお技術的な側面について当日の運営上重要だつたのは Zoom の管理と研究発表の司会を分散させることであつた。当日は Zoom 管理を運営委員の一人が担当し、筆者が司会を受け持つた。Zoom 管理者には入室の管理やミュートなどを任せ、Zoom 管理者と司会は LINE によって別個連絡を取り、進行に関する細かな打ち合わせを同時進行で行つた。Zoom のプライバシーチャット機能などはあるが、万一 Zoom がダウンするなどの状況に陥つた場合、他のリアルタイムでの連絡を保持する必要があるため、別のプラットフォームを利用した。

以上の経緯を踏まえて第二回および第三回の研究会（十一月

一日)も同様に実施し、それぞれ大過なく、かつ活発に議論の場を構築することが出来た。

次に怪異怪談研究会は、二〇一二年に第一次研究会を立ち上げ、二〇一七年から第二次研究会へとシフトし、現在メンバーがリスト登録者だけでも百名を超えるメンバーを擁する、「近代に生じた文化規範の劇的な変化を意識しながら、江戸時代から現代における怪異へのまなざし、怪談に集約された物語の内幕を明らかにすることを目的とする」研究会である。同研究会もコロナ禍のなかで五月に実施予定であった研究会の延期を余儀なくされ、六月一日にZoomミーティングにて実施の運びとなった。同日はすでに参加者相互が既知の研究会であり、また遠隔授業にも慣れつつある時期でもあったため、前項の日本学研究会と運営上の差異はそこまでなく、気心の知れた参加者だからこそ成り立つ和気藹々としつつ活発な議論が音声とチャットとで展開していた。同研究会の遠隔開催第二回目となったのは九月四、五日の二日間に行われた東北大学文学研究科(現代日本学研究室・日本文学研究室)との共催企画「地域文化としての怪異怪談」であった。Google Meetを利用して行った同企画のなかでも本稿の趣旨から特筆すべきは五日に行われたシンポジウム「地域文化としての怪異怪談」と鼎談「土地と怪談―みちのく怪談一〇年―」である。そこで若干の問題となったのはシンポジウムの共同討議と鼎談の際の発話のタイミ

ングであった。対面であればお互いの雰囲気をつつと下々発止のやり取りが可能となるどころ、登壇者が別空間にいるため状況が掴みづらく、やや間延びした展開が生まれたようにも感じられた。シンポジウムの討議や対談・鼎談などが一種のパフォーマンスタとして成り立つ側面を考えれば、これらの実施に際しては登壇者に限って対面で集まり、その様子を配信することもあり得たかも知れない。

以上の研究会運営の事例から見える研究会オンライン化の可能性としては大きく三点が挙げられる。

まず、従来参加の難しかった遠方からの参加可能性である。両研究会ともに海外からの参加があり、中国・ドイツ・ブラジルなど多様な地域からのアクセスを得ている。勿論時差問題はあるものの、海外からわざわざ参加することの障壁が高い小規模研究会において恩恵は大きい。同時にこれは海外のみならず国内における距離を縮めるものともなっている。小規模研究会が他の学会・研究会と日程の重複を起こすことはままあり、時に何処に出席すべきか悩むことはあるが、遠隔化によって所謂学会の「ハシゴ」をすることは格段に容易になった。また、これは特に院生やポスドクなど若手研究者にとっても移動にかかる金銭的負担を低減させられるという意味において利点となる。負担の低減は小規模研究会にとつての二つ目の可能性でもある。これまで学内レベルの研究会では会場の設営や受付業務、

会場内のマイク回しや撮影など、人員を要する箇所は多く、往々にしてそれは若手の仕事として特段の報酬のないまま行われ、同時にそれらの作業を割り振られたことで学会に参加しているながら研究報告を視聴できないという状況もあった。これらの要素の排除は決してネガティブなものではないだろう。

三つ目としては新しい知的展開の可能性がある。両研究会では金銭的なコストをかけられないため、一対多数型のウェビナーではなく多人数双方向参加を可能とするミーティングを採用している。この方法の下では通常の質疑に加えてチャットやコメント機能による多様なアクションを期待することが出来、議論が活発化することが期待される。例えば議論中に外部の資料(WebサイトのURLや書誌情報など)を共有することが出来るのはこれまでの対面での研究機会では達成できなかったことだろう。勿論所謂Zoom Bombing等の外部からの悪意に弱いものではあるが、同時にある程度参加者を知り得る小規模研究会においては有効に働く可能性を有していると考えられる。

続けて課題としては大きく四点を挙げられよう。

一つ目は、初期費用がかかることである。「可能性」として掲げたコストの低減は、同時に初期投資を必要とするものである。特に収入源の限られている若手にとつて安定的な情報インフラを揃えることは決して小さい負担とは言えない。

第二点は非公式的な研究者間の関係形成に困難が生じる点で

ある。研究会は公式に用意されたもので閉じるだけのものではなく、既に岡野裕行氏がオンライン学会化による非公式な交流の場の喪失について「特に若手研究者の新たなネットワーク形成に支障が出ている可能性は高い」と指摘しているのは正鵠を射ている。とりわけ大学レベルの研究会は時に集団内の紐帯を再確認する場ともなり、また新規参加者にとつては未知の研究コミュニティへの入り口が開かれている可能性もあるが、そこへのアクセスが難しくなる状況が生まれているのは間違いない。(逆にインフォーマルな場の喪失によって従来不利益を被っていた人が救済されるという可能性は勿論あり得るだろう)

以上二点は基本的に若手研究者に負担を強いるものであり、コロナ禍という「例外状況」の中でより弱い立場にしわ寄せがきた結果とも言え、既存の制度に内在していた問題が顕在化したとも言える。その一方で課題の第三点としてはICT非対応者の実質的な排除を挙げたい。オンライン化によって同様の(研究環境への対応が難しい(特に年長の)研究者の参加が妨げられている。抑々学会は参加者の多様性が魅力であることは間違いないが、それを緩やかながら減殺していることは否めない。

第四点は研究会が既存のプラットフォームへの依存状態となることである。本稿ではZoomとGoogleに言及したが、特に後者は既にグローバル経済の中の新たな(帝国)として批判を集める対象でもある。遠隔化はある程度参加者に共有可能なプラットフォームを使用する必要があり、一つのプラット

フォームに集約したほうが効率的である以上、それらへの依存度は自然高くなり、実質的に〈帝国〉に貢献してしまう状況は避けたいと言える。

今後これらの課題とどう向き合うのか、その上で新たなオンライン研究会の可能性が如何にしてありうるのか、本稿がその問いをひらく一助となるならば望外の幸せである。

- 注(1) かかる試みの一環として、二〇二〇年度前期の人文社会学系遠隔授業の実践報告を集積した書籍、大嶋えり子・小泉勇人・茂木謙之介編著『遠隔でつくる人文社会学知―2020年度前期の授業実践報告―』（雷音学術出版、二〇二〇）がある。原稿執筆をSNSで呼びかけ、出版社を立ち上げ、ISBNを取得するとともに全文をオンライン公開した。https://sites.google.com/view/lonpress [二〇二一年一月六日閲覧]
- (2) 清水潤著『怪異怪談研究会編『鏡花と妖怪』（青弓社、二〇一八）奥付参照。
- (3) この様子については赤井紀美「画面越しでも怪異怪談」『怪と幽』第五号、二〇二〇年八月）を参照のこと。
- (4) この様子については小松史生子「地域文化としての怪異怪談」『怪と幽』第六号、二〇二〇年十二月）を参照のこと。
- (5) 岡野裕行「敵を見て矢を矧ぐ／矢を矧ぐための敵」『日本近代文学』二〇三集、二〇二〇年二月）

## ■ 展 望 ■

### アンソロジーを編むことの可能性と課題

復刻版の資料集もアンソロジーと考えるなら、現在進行中の企画も含めて、監修・編集をしてきたアンソロジーは二〇〇冊を超える。しかし今回、日本近代文学会編集委員会から表題の原稿依頼をされたのは、『猫の文学館Ⅰ―世界は今、猫のものになる』（二〇一七年）から断続的に、「の文学館」のアンソロジーを、ちくま文庫で編んできたからだろう。他の仕事と並行して作業を進めるので、刊行は年に一〜二冊。サブタイトルを検討中の『石の文学館』（二〇二二年四月刊行予定）まで、約四年間で六冊ということになる。動機はとも単純だった。阪神淡路大震災の直後に出会い、一五年間ほど家族として暮らし、二匹のネコが死んだとき、生きた証を残したいと思った。で、巻末に編者エッセイを書けばいい——そう考えてこのシリーズはスタートした。

【キーワード】 遠隔、ICT、若手問題、オンライン学会、学会運営

（もてぎ・けんのすけ／東北大学）

### 和田博文

動機は個人的だが、アンソロジーのプランニングになると話は別である。二冊の『猫の文学館』の後は、『月の文学館』『星の文学館』『森の文学館』をまとめた。漢字一文字の、テーマの入れ換えである。別の言い方をすると、作者名で統括するアンソロジーにはしたくなかった。大学院に入学した一九七九年を起点すると四二年間、大学の専任講師になった一九八四年から数えると三七年間、文学は研究対象の一つである。しかし単著・編著・共編著のなかで、書名に作者名を入れた本はほとんどない。原稿依頼の際にすでに書名が決まっていた『風呂で読む宮澤賢治』（一九九六年、世界思想社）と、国際交流基金・日本近代文学館共催のパリ国際シンポジウムの記録『川端康成スタディーズ』（二〇一六年、笠間書院）が、わずかな例外である。作者名で統括される世界とは、異なる世界の構築を、研究の世界では目指してきた。